

やはり最近の比企谷八幡の女の子事情はまちがっている。

八橋夏目

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

比企谷八幡の周りの女の子による現状報告。

続編：やはり最近の俺の女の子事情はまちがっている。の方も宜しく願います。

目次

いろはのターン	1
雪乃のターン	5
南のターン	9
京華のターン	16
留美のターン	19
結衣のターン	28
陽乃のターン	35
千佳のターン	44
めぐりのターン	49
沙希のターン	57
かおりのターン	63
姫菜のターン	71

小町のターン

いろはのターン

最近、先輩の身の回り、というか女の子との接触が増えてきている。

私を含めてこの腐ったような目の先輩を狙っている女の子は、私が分かっているだけでも私を含めて最低五人はいる。

この総武高校には葉山隼人というイケメンな男子生徒がいるけど、私たちはなぜかこの捻くれた先輩に惹かれてしまっている。

顔は葉山先輩の方がイケメンだし、多方面からいろんな、それも老若男女問わず好かれている葉山先輩の方が取り合いになってるのが現実だ。彼もそれを自覚しているし、そんな競争が表立って広がらないように、上手く躲している。

それに比べてこの先輩ときたら、全くのように私たちの好意に気づこうとしない。いや、結衣先輩のあからさまな好意には気づいているような節も見えるが、だからといって自分から何か行動を起こそうとはしない。

そんな彼が最近、女の子との肌の接触が多くなってきたような気がする。

特に結衣先輩が一番多い。

まあ、彼女の場合には隠してるともりなんだろうけど、先輩への好き好きオーラが滲み出すぎていて、それが決壊したかのように事あるごとに先輩の腕に抱きつく習性が出てきている。前から、雪ノ下先輩に抱きつくのは目にしてきた（というかほぼ毎日見ている）が、先輩に対してはどこか一步引いている節が見受けられていた。特に気の無い男子に対しては、あまりそういうことはしないって言ってたけど、先輩に対してはあからさまに我慢していた感じだった。それが、いつの間にか気づいたら抱きつく習性ができている、先輩も嫌がるそぶりを見せない。以前だったら、強引にでも引き剥がしそうなものなのに、今は当たり前のように受け入れている。

次に多いのは妹の小町ちゃんだ。

彼の妹で四月から総武高校にきて、私の後輩にもなるけど、先輩から聞いていた姿とは少し違った。なんとというか妹が兄に抱きついていてる感じがしないのだ。色があるというか、抱きついていてる時の小町ちゃんの顔が時折艶かしいものになるのだ。当然先輩はそんな顔をしていることに気づきもしないし、シスコンだから嫌がるどころか待ち焦がれてくるくらい勢いだしで。胸が当たってようが先輩の手が小町ちゃんのお尻に触れていようが御構い無しの状態なのである。

次に多いのはまあ私なだけけど。

先の二人の様子を見てみると私も先輩に触れなくなってしまうのだ。特に気負う必要のない先輩にはありのままの私で居られるし、あざとさを出すことで言い訳にもなつて、なんだかんだで触れてしまっている。二人みたいに抱きつくようなことはないが、ふとした瞬間に座っている先輩の肩に手を乗せてみたり、耳元でそつと囁いてみたり、手をつないでみたり。周りに人がいないようなところでしか私もできないけど、それでも先輩は嫌がる素振りを全く見せない。逆に、頭を撫でられたり手を握り返されてしまうのだ。戸惑う彼を見たいのにこれでは私の方が戸惑つてしまい、恥ずかしい姿を見られてしまっている。あ、あと一回だけ太ももを触られたこともあったな。

で、素直になれない雪ノ下先輩はそれはそれでかわいいものがある。普段は凜としていてかっこいいのに、私たちが先輩にベタベタしていると読書をしていてもチラチラこつちをみてるのだ。しまいにはプルプル震えだし、手を伸ばしては押さえつけたりと、触りたいのに我慢しているのが丸見え。そんな素直になれない彼女のために一度先輩と二人きりにしてみたら、膝の上に乗って抱きついていた。枷が外れるとこんなに甘えん坊になるのに驚きだったのは、覗いていた三人だけの内緒である。というかキスしそうな雰囲気まで行ったので、三人で乗り込んでやった。その時の二人が可愛

かったから、またしたいと思ってしまう私はなんなんだろう。

そんなこんなで最近の先輩は私たちの好意に“気づいている”のか“気づいていない”のかよくわからない状態である。たぶん、気づいているんだろうな。けど、誰かを傷つけてしまうとか考えて今の状態に甘えているのかもしれない。まあ、それは私たちもなんだけどもね。私たちの誰かが告白したら、たぶん今の関係は壊れてしまう。先輩が勝手にやらかすのは見えている。だから、私たちはこれでいいのかもしれない。でも、それが先輩の言う本物でもないような気がする。

あああー、もう、なんか面倒くさい。

とりあえず、先輩に抱きついてこよーっと。

雪乃のターン

最近、奉仕部の備品改め、比企谷君がよく女の子と一緒にいるのをよく見かける。

特に私には興味がないことだけれど、気づけば彼が視界の中にいるのだから、いやでも目にしてしまう。

彼は密かに人気があるようで、彼のクラスでは由比ヶ浜さんを筆頭に様々な人たちが彼のことを気にかけている。その中でも由比ヶ浜さんと川崎さんと、あと海老名さんもかしら。彼女たちの中の彼はクラスの男子、というよりは一人の男となっているようで、時折彼女たちが比企谷君にアプローチをかけている。彼はそのことに”気づいていない”のか”気づいていない”のかはつきりとした態度でいるため、彼女たちも面倒な男に好意を寄せてしまったみたいで大変そうだな。彼女たち以外にもそういう女の子はたくさんいるのだけれど、私には彼のなにかいいのかわかるか全く理解できないわ。

そうね、彼の一日を少し見てみましょうか。

朝、彼は妹の小町さんと登校してくるわ。学年が違うため自ずと昇降口で別れること

になるのだけれど、それまでの二人はとにかくベタベタとしている。小町さんが何かと彼の腕に抱きついては、胸を押し当てているようで、さすがにそれには気づいている比企谷君も顔を赤くしていたわ。それでも振り解こうとしないのが彼らしいのだけれど。羨ましいわね。

教室に着くとまず彼に声をかけるのが由比ヶ浜さん。彼女は比企谷君よりも毎日先に来て、彼が教室に来るのを三浦さんたちと待っているわ。三浦さんたちもそんな彼女の行動が毎日続けば、習慣化しているようで「いつてらっしやい」と見送る始末。そんな彼女の後ろ姿を海老名さんが見ているのだけれど、彼女が行動するのはまだあのとこと。なにやら順番があるようで、女社会というものも面倒だと思う。

由比ヶ浜さんとはかく彼によく抱きつく。小町さんとはまた違って、胸に彼の腕を挟んでしまうのだ。しかもそれを無意識でやっているのだから、食えない子よね。一色さんの方がよっぽど可愛く見えてくるわ。

で、そんな由比ヶ浜さんに抱きつかれた彼は、まず豊満な胸の感触を楽しむように、腕の方に気を回している。なぜわかるのかと言われれば、彼がその間の会話をいつも聞いていないからだ。適当に流しているため頭にも残らない。残らないのは胸の方に集中しているからってわけ。

まあ、朝は大体こんな感じなのだけれど、休み時間がまたすごい。新学期になつてか

ら彼は川崎さんの隣の席になったようでよく二人で会話をしている。彼女の場合は結構恥ずかしがり屋なため、肌の接触はないが、その分昼休みになる彼とおかずの交換をしていたりするわ。それで高評価をもらおうとまた別の日に作ってきて、彼の胃袋を掴みにかかっているの。そんなことしているのは彼女だけだから、比企谷君にとってはそれがまた新鮮なのかもしれない。

ただ、昼休みは毎日川崎さんが彼を独占しているわけではない。違う日には海老名さんがここで彼と接触を凶っている。彼がベストプレイスと呼んでいる渡り廊下のところを捕捉し、二人きりの状況に持ち込んでいる。彼女の趣味は比企谷君の趣味と合致するところがあり、会話がよく弾んでいる。あのコミュ障の彼があれだけつらつらと話しているのは、千葉のことについて語っている時か、彼の持論を語っている時にしか見たことがない。そういうところを見るとなんだか悔しくなってくるのだから人間って不思議よね。

放課後になると戸塚君が彼と妖しい関係を築いてから部活へと行く。そして、その後によく由比ヶ浜さんと二人で肩を寄せ合いながら、奉仕部へとやってくるわ。

え？ 一色さん？

彼女はここからよ。学年も違えば生徒会の仕事で忙しくしている彼女は生徒会を出汁に彼を連れて行くのよ。断ろうと思えば断れることなのだけれど、彼女の場合は言葉

の一つ一つ、行動の一つ一つが武器になってしまふのだから結局従わざるを得ない状況になってしまふ（主に私や由比ヶ浜さんがだけど）。二人きりの生徒会室でなにをしているのかは知らないけど、彼女が暇を持って余して部屋に来る時は彼とのスキンシップが尋常じゃない。見る角度によっては一方的にキスをしているかのようにも見えるのよ。そして、それを見た由比ヶ浜さんが対抗心を燃やして彼の腕に抱きついて、小町さんも悪ノリして彼に抱きついて……………。

と思いきや、ある日そんな行動をした後の三人が部屋からいなくなった時間ができたの。

だから、私もーー。

と、まあ、こんな感じに比企谷君はどうしようもない女たらしであることはわかってもらえたかしら。

思い出したら腹が立ってきたわね。今度はどうしてあげようかしら、ふふふつ。

南のターン

最近、あいつの周りがすごいことになってる。教室じゃ結衣ちゃんたちに囲まれて、放課後には生徒会長と一緒にいるのをよく見かけるのだ。

そもそもうちがあいつのことを認識したのは去年の文化祭の時。実際には夏休み中の花火大会で結衣ちゃんと一緒にいたらしいけど、それは後になって気づいたことだ。文化祭の準備が始まった時、うちは実行委員に立候補した。その時は誰もやろうとしないからうちがやれば周りからも好印象で見られるかも、という軽い気持ちからだ。実際に実行委員が始まってからも実行委員長に誰もなろうとしないから実行委員長になった。たぶんそこから色々と崩れていったんだと思う。

軽い気持ちで始めた実行委員長は思いの外、うちには手にあまる役職だったようで、場を仕切りながらもうまく回るように頭の中で先を読んでいくことが難しかった。だから、同じ実行委員にいた雪ノ下さんに副委員長になってくれるように頼み込んだ。

彼女は校内では誰もが知る秀才で、副委員長としても十二分の才能を發揮していた。彼女が指示を出すようになってから仕事の能率が早まり、少し緩めてもいいくらいの余

裕さえできていた。そんな彼女を見ていると自分が実行委員長になった意味を見失ってしまった。すると、そこから段々とクラスの方に顔を出したくなり、委員会には遅刻するようにもなった。そんなある日、余裕があるということでもクラスの準備にも参加できると言った。これでうちも気兼ねなくクラスの方にいられるし、これでこそうちが求めていた文化祭だとも思った。

だけど、余裕のあつた時間は人手不足で仕事が停滞しており、これでは文化祭を迎えられないというところまで来ていた。うちがそれに気づいたのは文化祭のテーマを決める際に全員が集まった日。元々、うちを含めてほとんどの生徒がクラスの方を楽しみたいという思いが強く、会議にはやる気が一切感じられなかった。そんな中であいつは明らかに爆弾を落としてきた。

『人　よく見たら片方楽しってる文化祭〜』

それがあいつが掲げた文化祭のテーマだった。

聞いた時には思わず絶句してしまった。

よくこんな場面で自分が楽しみたいがためにそんなこと口にできるな、と思った。

雪ノ下さんのお姉さんはバカだと言っていた。うちもそうだと思った。

当の雪ノ下さんもあいつの説明を聞いた後、紙束で顔を隠して笑い、笑顔で却下した。そう、全員に否定された。でも否定されたのにあいつは平然としていた。まるでうち

らを嘲笑うかのように。

それからは全員強制参加となり、やってくれたなと思った。あいつはうまく雪ノ下さんを使って自分が楽になるように仕向けたのだ。まあ、雪ノ下さんにより仕事がなくなることは全くなく、逆に増えたりもしてたけど。それでもあいつは何も言わず全てをこなしていた。みんなの目には敵が黙々とやっているように見えたのだろう。俄然、やる気を出したみんな”の”おかげで無事準備は全てが終わった。

その間、うちはただ・判を押しているだけだった。

ああ、うちっていらぬ子じゃん……………。

そう思ってしまったからは全てが負の連鎖だった。オープニングセレモニーでの実行委員長の挨拶では緊張しすぎて言葉が続かなくなるし、何でもできる雪ノ下さんを見ていると自分が惨めに思えてしまった。

それともう一人、普段はマンガとかでいうとこのモブキャラにしか過ぎないあいつが優秀だったことがさらに負のスパイラルへとうちを引きずり落とした。

何時間、屋上にいたのかはわからない。今、体育館で何の催しがされているのかもわからない。そんなことを風に流していたら――

ーあいつが来た。

なんで来たのがこいつなのだろう。なんで葉山君じゃないんだろう。結局誰もうちのことなんて……。そんな考えが頭を過ぎったが、すぐに葉山君たちも駆けつけてきた。うちを連れ戻そうと必死に説得してくるが、こんな迷惑をみんなにかけたうちは最低だと口にしたら、それは他人の言葉としても突きつけられた。

あいつは全て分かっていたのだ。何も知らないくせに何もかもを見透かされているようだった。

あいつはうちの核心を言葉でついてきた。でも言葉を返せないでいると代わりに葉山君があいつの襟首を掴みかかった。気づけばいろいろとこみ上げてきたものが全てあいつに対する怒りに変わっていて。

なんとかエンディングセレモニーを終わらせて、実行委員長から解放された。

次に学校に来た時にはあいつの悪評が学校中に広がっていた。いい気味だと思った。うちを散々馬鹿にしてくれたんだ。これくらい普通だ。

程なくして、体育祭の準備が始まり、今度は雪ノ下さんたちの方からうちに実行委員長になるように頼み込まれた。なんでうちが、とは思ったが葉山君がまたしても賛同してくれたので引き受けることにした。

今回は特に問題はなく順調に進んでいた。なのに、競技の内容で遙とゆつこと対立することになってしまった。文化祭では友達だったはずなのに。あれだけ、あいつのことを一緒に馬鹿にしていたのに。

うちはすでに首脳部グループの人間としてみられていたらしい。それで気づいた。人間関係とはこんなにも脆く壊れやすいものだったんだ。

どうしていいかわからないまま時間は過ぎていき、首脳部だけでの会議を開いた時に瀧れからのことを話し合った。いろんな意見が出る中で、またしてもあいつは爆弾を落とした。

それは体育祭そのものを人質に取るものだった。よくこんな最低な考えが思いつくなどと思った反面、なぜか悔しくもなった。みんな、雪ノ下さんも結衣ちゃんも生徒会長まで理解を示していたのだ。だから、うちも腹をくくることがにした。たぶん、これであいつの驚いた顔が見れる。これで、あいつに一泡吹かせることができるのなら安いもんだとさえ思った。

会議当日にうちは決行した。それはとにかく謝ることだった。みんなの前でこれだ

け謝ってしまえばうちに、うちらに反論する気が起きない、そう確信があった。それはうち自身が文化祭で経験したから。

とにかく泣いて詫びて退場した。部屋を出てから、いろいろと文化祭のことが蘇ってきた。たぶん、あいつもあの会議の後はこんな気分だったんだろう。

ああ、そうか。うちはいいつに助けられたんだな……………。

あいつがいなければ文化祭の後の標的はうちに向いていたんだ。それをあいつは同情を煽ることであいつがやらかしたことを隠してしまっただ。

たぶん、それからだと思う。うちがあいつのことを目で追うようになっていたのは。だけど、あいつに近づこうとは思わない。あいつの周りにはすでに何人も美少女がいて、うちなんかいたところであいつの目には映らないから。

でもようやく、結衣ちゃんが彼を気に入ってるのを理解できた。表には出さないがいつの間にか助けられてる、そんな不器用な優しさに惹かれているのだろう。それはたぶん、雪ノ下さんも同じで。

三年になってからのあいつは拍車がかかったように女の子に詰め寄られている。クラス内だけでも結衣ちゃんに川崎さんに、あと戸塚君もなのかな。

それ以外にも今の後輩生徒会長や妹だと思われる一年生に毎日のように抱きつかれている。そんなあいつを遠巻きに見ているのはうちと雪ノ下さんくらいだろう。逆になぜあの雪ノ下さんが見ているだけなのかもわからないけど、毎日教室付近で見ているのは怖いからやめてほしい。

そう言えば、この前出かけた時にも見たことのない女の子と歩いてたっけ。小学生か中学生くらいの女の子と手をつないで歩いているのを見た。顔は似てないしアホ毛もないから、たぶん新手的女の子だろう。あいつ、いつもぼっちぼっち口になっているけどうちよりも交友範囲が広いことに気づいてるのかな。

まあ、それよりも今はこの目の前の状況をどうにかしてやりたい。

なんなのこれ。うちに対する嫌がらせかなんかなの。

うちの前の席では腕を結衣ちゃん胸に挟まれ、楽しく川崎さんと話しているあいつがいる。

なんかいろいろと思い出していたら、段々腹が立ってきた。

「ちよ、なんだよ、相模。やめ、消しゴム投げんな」

ふん、うちの目の前でいちゃいちゃしてるアンタが悪いんだから。

バーカバーカ。

京華のターン

さいきん、さーちゃんとはーちゃんがなかよしさんなの。おうちでもまえよりはーちゃんのおはなしをしてくれるようになって、けーちゃんもううれしいの。

はーちゃんね、とつてもやさしいんだよ。このまえなんかね、おやすみの日におそとにおさんぽにいったときにね、こうえんにはーちゃんがいたの。はしつてだきついたら、そのままたかいたかいしてくれたんだよ。そのあとはね、はーちゃんとさーちゃんとなすなばでお山をつくったり、とんねるをほったりしたんだよ。でもね、ときどきさーちゃんとはーちゃんの目があうとね二人ともおかがまつ赤になったの。おねつでも出たのかとおもつてけーちゃんのおでこでおねつをはかつてあげたらね。二人ともすなばでごろごろころがりだしたの。それでね、こんどは手と手がふれてまたおかがまつ赤になつちやつたんだよ。二人ともどうしちやつたんだらうね。

おひるごはんのじかんになったから、はーちゃんとバイバイすることになったんだけど、ちようどそのときにね、茶色いかみのおねえちゃんのはーちゃんにだきついてきたの。はーちゃんはいきなりだったからおどろいてただけね、そのときはーちゃん

のおかおがかわいかったんだよ。なんだか、さーちゃんみたいだね、ほんとうにかわいかったの。とおもったらそのおねえちゃんのことはさーちゃんも知ってるみたいで、おどろいてたの。はーちゃんとさーちゃんおんなじおかおー。

それからね、たくさんのおねえちゃんがきたんだよ。おむねの大きいおねえちゃんや黒くてながいかみのおねえちゃん。あとクリスマスパーティーのときに、げきのしゅやく？ をやってたおねえちゃんね、はーちゃんの妹のおねえちゃんもいたよ。はーちゃんのみんなどすぐくなくなよしさんで、みんなではーちゃんをとりあつたんだよ。たしかこういうのをしゅちにくりん？ っていうんだよね。はーちゃんうれしそうでけーちゃんもうれしかつたよ。さーちゃんもまざればよかつたのに。さーちゃんはいつつてもがまんばかりしてるんだから、こういうときくらいはーちゃんにあまえればいいのになー。はーちゃんもよろこぶとおもうんだけどなー。

そのあとね、みんなでおひるごはんをたべることになったんだよ。はーちゃんがサイゼっていつたらみんなバカにしてただけど、けつきよくみんなついてくるの。みんなすなおじゃないよねー。けーちゃんはすなおだからはーちゃんとサイゼにいけるってだけでこんなにもウキウキしたのははじめてだよ。

サイゼについたらねまずはせきのとりあいからはじまったの。はーちゃんのとなりにだれがすわるかでジャンケンになったんだけど、もちろんけーちゃんははーちゃん

おひぎの上だよ。はーちゃんの右にはさーちゃんがすわって、ひだりには茶色いかみのおねえちゃんがきたの。はーちゃんはいつもドリアをたのむんだって。はーちゃんのドリアがきたのを見てたらね、はーちゃんがアーンしてくれたの。あつくてやけどするかとおもったけど、おいしかったよ。さーちゃんからはパスタをアーンしてもらっておなかいっぱいになっちゃったの。そしたらね、ねむくなっちゃったからねちゃった。ごめんね、はーちゃん。たべづらかったよね。おわびにこんどはけーちゃんがはーちゃんにアーンしてあげるからね。

かえりに目がさめたらはーちゃんのせなかにいたんだー。あつたかくてきもちよかったのはいしよだよ。みんながうらやましがつちやうからね。

あ、そろそろおひるねのじかんだからこれでバイバイだよ。またねー。

留美のターン

最近、私は休みの日は八幡といることが多い。中学生になってからというものは、少し私の中の行動範囲が広くなってしまったようで、たまに八幡の家に行ったりしている。小町さんが快く迎え入れてくれるから、土曜日でも朝早くから八幡の家に行つては起こしたりしている。

ぶつちやけ、八幡は年下には甘い節があるから私がこんなことをしていても全く嫌がりはない（口では色々と言葉を捏ねくり回しているけど）。まあ、でもこうなったのは理由がないわけでもない。

中学生になったばかりの四月の中頃。街を歩いていると去年のクリスマスパーティーで場を仕切っていた八幡の高校の生徒会長が、うらやましいことに八幡と肩を並べて歩いていた。しかも二人だけで。生憎、二人に見つかりはしなかったけど、八幡が心配になって後を追ってみることにした。

和気藹々、とまではいかないにしても、生徒会長が話してるのを見る限り楽しそうだ。それと、どうも聞こえてくる会話から推測するに、その日は彼女の誕生日だったらしい。

ああ、だから他の二人はいないわけだ。彼女のことだから特別な日である誕生日を武器に八幡を独占したのだろう。そこに八幡の意見はなかったのは聞かなくても分かる。かわいそうな八幡。大丈夫だよ、もうじき私が癒してあげるから。

それからは二人で雑貨屋に行ったり、ラーメン屋に行ったりしていた。どうやら以前にも八幡は彼女をお気に入り、ラーメン屋に連れて行ったことがあるらしく、その日は生徒会長さんのリクエストにより、再び来店することになったんだって。私ももう少し早く生まれてれば、ああやって八幡の横に並んでお出かけできたのかな……。

取り敢えず、私はコンビニで買ったあんパンと牛乳を片手に遠巻きながら八幡たちがラーメン屋から出てくるのを待っていた。案外、私はぼーつとしているのが好きなように、八幡たちが出てくるまでの間もそれはそれで楽しかった。

ラーメン屋を後にすると今度は「卓球しましよ」とか生徒会長が言い出し、ゲームセンターに行くことになった。あ、私この時初めてゲームセンターに一人で入ったんだよね。そもそも行ってもお金がないから、お父さんと買い物に行った時にモールにあるゲームセンターで時間をつぶすくらいだ（つまりお父さんと出かけることが滅多にない）。でも音楽ゲームをするための専用のカードは持っていたりするんだから、不思議だよね。

取り敢えず、卓球台の近くにあった十六マスの叩く音楽ゲームで時間をつぶすことに

した。視界の端に二人の姿を映しながら、八幡が好きそうなアニメの曲を選択する。レベルはまだ7が限界。8じゃちよつとが難しくくてクリアできないんだよね。この曲はレベル6だから準備運動としてはやりやすいだね。

一曲目が終わって二人を見ると二人は卓球に没頭していて、私がそばにいることには気づいていない様子。この分では後三十分くらいはやってそう。私は二曲目を選択して意識をゲームに戻す。横の高校生くらいの男の人の腕が目で追いつけないくらい動いているのは見なかったことにしよう。私じゃ、あそこまでできないしね。

二曲目も終わってラスト一曲。最後は何かレベル8の曲でもやろうかな、という気分になり夏用ベストを身につけた制服の女の子が二人描かれている画像を選択。この曲の原作がなんなのかはわからないけど、たぶん八幡に聞けばわかると思う。そのうち聞いてみよう。

それから。

やったよ！ 判定Cだったけど一応クリアしたよ！

すごく指が痛いけどね。

つて、ああそういえば私は八幡たちを追いかけてたんだつた。二人はどうしてるかなー。

……………意外と八幡が勝っていた。

へー、八幡って卓球強いんだ。あ、それとも生徒会長の方が弱いのかな。

後ろにも人が並んでいるので、卓球台近くのベンチに移動した。

より近くはなったけど、いかんせんゲームセンターはうるさいので二人の声は聞こえない。

あーあ、楽しそうにしちゃって。ここで私が乱入したらどうなるのかなー、怒られるかなー。でもいいなー、混ざりたいなー。

なんて考えていたら。

バツチリと。

二人と目があってしまった。

二人は声をそろえて「あ、こ」と固まっていたが、私はじつと見続ける。なんかちよつと見つかったのが嬉しかったりするから、声とか出そうものなら顔がフニャケちやいそうだった。

生徒会長は何事もなかったかのように「次いきますよー」とサーブの構えを取る。だ

けど、それを八幡は許さなかった。

八幡は私に声をかけてくれた。それを見た生徒会長も「はあ………」と深いため息を吐いて、こつちにやってきた。

なんでいるのか聞かれたので、真つ正直についてきたことを打ち明ける。それを聞いた八幡は一步私の方によってきたが、今度は生徒会長の方がそれを良しとはしなかった。私を自分の胸の中に抱き寄せると「こんな幼気な美少女まで先輩の毒牙にかける気ですか！　させませんよ、させませんからっ！」なんて言い出した。私は人形のように固まったまま聞いていたけど、この人私をまだ小学生扱いしてるのかな。一応もう中学生なんだけどな。

というか、毒牙って何？

しかも「まで」っていうことは他にも毒牙にかかっている人がいるってこと？

ああ、そういうすでにここに一人いたよね。亜麻色の髪で私の鼻をくすぐってくる人が。

それからはなぜか三人で街を巡ることになった。何気生徒会長も年下には甘いよね。まあ、私はそれを分かった上で受け入れてるから、何も言える立場じゃないけど。

その日は街中で解散したから特に何もなかったんだけど。

週明けの月曜日。その日はなぜか無性に八幡に会いたくなってしまった。放課後、私
は気がついたら総武高校の前に行っていたんだから、相当重症だよ。中学生が高校の前
にいるのはどうにも違和感がある。ぽつぽつと昇降口から出てくる生徒の流れを眺め
ながら、八幡の姿がないか探してみる。

.....

.....

.....

出てこない。

それから数十分。

今更だけど、八幡って奉仕部とかっていう部活に入ってたよね。これって結構待たな
きゃいけないやつじゃない？

まあ、空でも見てようかなーと上を向くと金髪のウェーブのかかった髪の人と目が
あった。

どうやらあっちも目があつたことに気がついたようで、じっと見つめてくる。

ああ、千葉村に行った時にいた金髪の人だ。

彼女もようやく私が誰なのか分かったみたいで声をかけてきた。

取り敢えずここに来た経緯を話すと「はあ.....最近のヒキオは.....」と深いため

息を吐いた。スマホを取り出すと誰かに電話をしだし、しばらくすると大きな胸が揺れているのが視界に入った。

あれは確か八幡とよく一緒にいる二人の片割れの……胸だけがでかいアホっぽい人。

無事に私の受け渡しが終わわり、入校許可証をもらって、奉仕部へと連れて行かれた。意外とそういうところには気が回るんだよな、この人。それとも八幡の差し金なのか？

奉仕部に着くと待っていたのは千葉村で見たメンバーに生徒会長だった。あれ？

生徒会長って奉仕部の部員なの？

それからは生徒会長が持ち出してきたパイプ椅子に座って、出された紅茶をありがたくいただく。うん、おいしい。やっぱり、未来の私（みたいな黒長髪の人）は何をして完璧である。私も紅茶の入れ方とか勉強した方がいいのかな。

なんてゆったりしていると八幡に心配されてしまった。「中学でも友達が………」とか言ってきたため私は首を横に振った。確かにすぐに友達ができたってことはなかったけど、八幡がこれまでに道を示してくれたから惨めな思いはしてない。それ以上に今は八幡の方が心配だった。土曜日の誕生日デートを見る限り、他にも八幡を狙っている人がいるのが分かった。それが理由でできたことを伝えると、女性陣が顔を赤くし

た。妹の小町さん以外は色々と言葉を捏ねくりまわして否定はしていたが、ぼそつと「八幡みたい……………」って言ったら、急に黙ってしまった。なんかこの人たちで遊ぶのも楽しいかも……………。

それからは改めて中学生になったことを祝われたり、制服姿を八幡に褒めてもらえた。

あと連絡先も交換した。

たぶん、これが大きかったんだろうな。

その日から八幡や小町さんたちと連絡を取るようになり、二週間くらい経った頃の土曜日に八幡の家に行くお許しがもらえたのだから。ここから比企谷家訪問が始まったと言っても過言ではない。

そして今日も行くことにしてただけど。ちよつと寝坊した。心地いい天気で寝つきが良すぎたのが悪かったのだ。私が悪いわけではない。

十一時過ぎに比企谷家に着くと八幡はすでに起きていて、九時過ぎには近くの公園に行ったらしかった。珍しいこともあるんだね。あの八幡が休日には早起きするなんて。それから少し雑談をして小町さんと二人で公園まで行くと青みのかかった長い髪の女の人とその人に似た小さい子と一緒に砂場で遊んでいた。あれ、八幡だよね……………？休日のお父さんみたい。それから三人の様子をベンチに座って見ていると、女の

人と手が触れ合つて顔を赤くしてたり、小さい子におでこをピトつと当てられて、二人して砂場でごろごろ転がり始めた。周りに人がいないからいいけど、すごく気持ち悪い光景だった。

それからしばらくして三人が立ち上がると、どこからともなく現れた生徒会長によつて、八幡が捕獲されてしまった。しかもちようど公園の反対側の入り口からは奉仕部の二人がやってくる始末。右を向くとニコニコを小町さんが笑っていた。ああ、この人が呼んだのか。これはもう私達も行くしかないよね。

待っててね、八幡。いつか私の気持ちを伝えられるように私がんばるから。

結衣のターン

最近のあたしは、というかあたしの身体が変だ。無性にヒツキーに抱きつきたくなるのだ。今まではこういうことがなかったはずなのに……………、そりゃゆきのんには抱きついてたけどさ。なんていうか、こうヒツキーを見ると身体が熱くなって、ヒツキーの傍に行く和无性に触りたくなって、ヒツキーの匂いがあると我慢できなくなるの。身体が燃えるように熱くて、ヒツキーに触らないとその熱が取れなくなって……………。
なにか原因でもあるのかなー。

そもそもヒツキーこと、比企谷八幡は総武高校の入学式の日にあたしのペットであるサブレを助けてくれた恩人。身を呈してかばってくれたの。足の骨を折って入院しちゃったけどね。だから、家の方には謝りに行ったけど、本人には会えていない。病院に直接行けばよかつたんだらうけど、そんな勇気があたしにはなかった。だって、悪いのはあたしであって、あの黒い車の運転手さんも巻き込まれたようなものだし、彼に至っては骨まで折っちゃってるんだから、多分絶対確実に怒られることは分かっていた。それに彼に身体とかを求められたら……………とか色々考えちゃって、結局会いは

行けなかった。

それから彼が学校に来るようになって、同じクラスなのにずっと一人でいる彼の姿しか見たことがなかった。特に人と関わろうともせず、かといって不良のような素行の悪さも見受けられない、ただの男子生徒でしかなかった。確かに、遅れてクラスに加わればすでにグループはできてから入りづらいし、新たにグループを作れるような一人者はすでにいなかった。だから、彼が一人でいるのはあたしのせいだと思っていたけど、どうすればいいのか全くわからなかった。

テニス部に入った彩ちゃんによると体育の選択授業でテニスを選んだらしい。そこでも一人で壁打ちをしてたんだって。もうこれ、あたしのせいではないよね。

そのまま彼との接点は全くないまま、無事に二年になった（危なかったけど）。またクラスも彼と同じで、その頃にはあたしの中の彼はヒツキーという愛称になっていた。だって、ずっと一人でいるし、時々本を読みながらニヤけるからキモくて、まるで引きこもりの人みたいだったから……あたしのイメージでしかないんだけどね。

でも二年になっちゃったんだし、そろそろお礼も言わないとヤバイかなーと思い、クツキーでも作ってきつかけ作りから始めようと考えた。でもそもそもあたしクツキーの作り方なんて知らないし、ママに言ったら絶対からかわれるから頼みたくない

し。

で、そんな時にたまたま平塚先生が声をかけてくれて、奉仕部というものがあることを知った。名前のごとく、便利屋みたいなのかなーって軽い気持ちで、翌日教えてもらった空き教室に行くと、綺麗な黒長髪の女子生徒と――

――目の腐った男子生徒がいた。

いやもうね。ただただびっくりだったよ。

いつも一人でいるヒッキーが部活なんかに入ってたんだから。

でもちよつと困ったことになった。

渡す本人に相談とかいろいろとヤバくない？ ヤバイよね。絶対、気付かれちゃうし。

どうしようか悩んだけど、結局相談することにした。だって、ヒッキーの好みの味とか知るチャンスじゃない。

それから調理室の方に移動してクッキーを作ることになった。材料はいつの間にか用意されていた。先生が前日にゆきのんに教えてたのかな。来ることわかってたっばいし。あ、ゆきのんってのは雪ノ下雪乃ちゃんのことね。あたしが雪乃ちゃんとかなん

か笑える。ゆきのんはやっぱりゆきのんだよ。

でー、なんで焦げ焦げになっちゃったのかなー。ヒツキー曰く「ジョイフル本田に売ってる木炭みたいなもの」だつて。超失礼だし！

やっぱりあたしには才能がなかったみたいだね。

なんてことを口にしたら、ゆきのんに怒られたのは熱い思い出。たぶん、あれがなかったら、あたしは今のあたしではイラレなかつたと思う。そりや、今でも周りの空気を讀んじやうけどさ。あの時ゆきのんに指摘されなかつたら、意見を言おうだなんて思ひもしなかつただろうからね。そういう意味ではゆきのんもあたしの恩人だ！

それからヒツキーがそんなあたしたちを見て、十分後に来いとか言つて調理室から追い出された。その間、ゆきのんと他愛もない話をして時間を潰し、戻つてくると焦げ焦げのクツキーが用意されていた。なんだ、ヒツキーもクツキー作るの下手なんじゃん。あんな得意げに言つてたくせに……。とか思つてたら、あたしのクツキーだった。自分のを食べてまずいとか思つちやつたよ……。なんかヒツキーつていじわるだ。

ヒツキーが言うには世の男子は手作りクツキーを女の子から貰うというイベントに心が揺れるのであつて、味はその次なんだとか。よくわかんないけど、ヒツキーがそういうんだから、ヒツキーも揺れるんだよね。それを理解したら急に胸を締め付けられる感覚に陥つた。

あたしはそそくさと帰る準備をして逃げるように帰った。

ヒツキーは喜んでくれるんだ。でもやっぱりおいしいうものを食べて欲しいな。

それから、数日経つてもう一度、奉仕部へと向かった。練習の成果を見せるためだ。あとお礼も兼ねて。

てのが、ヒツキーに近づけたきっかけだ。それからあたしも奉仕部に入つて、まつたりとした時間を一緒に過ごした。そりゃ、あたしたちも人間だし、喧嘩というか意地の張り合いとかもしたよ。ほとんど、ヒツキーが悪いんだけど。それでも助けられた女の子はたくさんいる。・沙希や留美ちゃんやさがみんなにいろはちゃんも。もちろんあたしやゆきのんも助けられた女の子の一人だ。こうしてみるとヒツキーの周りには魅力的な子がたくさんいるんだよね。みんなにヒツキーのどこがいいのかを聞けば、たぶん最初に出てくるのは「分からない」だろう。顔は整った顔立ちをしてるし、目を瞑っているヒツキーはイケメンだ。なのに、あの濁った目がその全てを台無しにしているのだ。

でもヒツキーを狙う女の子は学校内には止まらない（あ、留美ちゃんは小学生……：今はもう中学生か）。ゆきのんのお姉さんの陽乃さんや”けーかいたいしよー”としては海浜の折本さん？ も危険人物である。陽乃さんは言わずもがなで、ヒツキーに

ちよつかいばかりかけてくるし、もつと危ないのはヒツキーの中学の同級生である折本さんはかつてヒツキーが告白したことがある女の子なのだ。今でこそヒツキーはそんな気は全くないって言ってるけど、今度はある子が狙ってくるって可能性がある。どうもヒツキーは中学の時とは随分変わっているようで、折本さんが心変わりしないとは限らないもん。

ああ、ダメだ……………。

ヒツキーが誰かに取られちゃうかと思うとまた体が熱くなってきた。まだ原因がわかってないのに……………。しかもまだ授業中なのに……………。ああ、どうしよお……………。

ちよつと態勢を変えるだけで、体の内側にある疼きが広がっていく。

やばいよお……………、あと五分もあるよお……………。

ヒツキーに触れたい、ヒツキーに触れたい、ヒツキーの匂いを嗅ぎたい、ヒツキーに抱きついて安心したい。ヒツキーと……………ああ、ダメダメ！ それはまだ……………はやいよおー

ーキーンコーンカーンコーン。

や、やっと終わった……。あとは挨拶だけ……。あたし本当にどうしちやったんだろう。今までよりも悪化してるじゃん……。ヒツキーのことを考えるだけで体が熱くなって、ヒツキーのことを考えるだけで触りたくなって、ヒツキーのことを考えるだけで匂いを嗅ぎたくなる。匂いを嗅いじやったら我慢がきかなくなるというのに、体の芯が燃えるように熱くて、疼く。たぶん今抱きついたも熱は収まらないようにも思える。

けど、あたしは我慢なんてしない。

欲しいものは全部手に入れたいから。

ヒツキーもゆきのんも絶対手に入れて見せるんだから。

ヒツキー、ゆきのん。

あたしががんばるから！ 見捨てないでね……。

陽乃のターン

最近の雪乃ちゃんの様子がおかしい。

まるでストーカーのように比企谷くんを観察している。

いろんな意味で心配になって、よく顔を出すようにしているけど、会うたびに比企谷くんの話ばかり。やれ彼がこんなことを言っていた、やれ周りの女の子たちが彼を取り囲んでいる。やれ自分も混ざりたいなど……。自覚してないんだらうけど、どんだけ比企谷くんのこと好きなのよって感じよね。一度、それを言ってみたら「ば、馬鹿なこと言わないでくれるかしら。わ、わ私は別に比企谷君のことなんて何とも思っていないし、ましてや好きだなんてそんなことありえるはずがないじゃない。ええそうよ。そもそもどうして私があんな誑し谷君のことを、その、す、好き、だなんて考えに至ったのかそこから説明して欲しいものね」だって。すごく目が泳いでて比企谷くんみたいだったってのは言わないでおいた。言ったら絶対泣き出すから。お姉ちゃんはそこまです、鬼じゃないんだぞっ☆

それとあの子、名前何ガハマちゃんだったけ？ まあ、あのお団子のガハマちゃんのこととも溺愛してるわね。今日は何回抱きつかれた、唇がほんの数センチまで迫ってきた、

たまに顔が赤い時があつてしかも震えだすから心配だ、などなど。我が妹ながらにしてなかなかの逸材になつてしまつたような気がするわ。そのうち捕まらないか心配よ。

でもちよつと雪乃ちゃんから伝え聞く比企谷くんも異常なようにも思えてくる。

まず、そもそも彼は基本ぼつちだつたはずだ。過去に何があつたのかは知らないけど、社会に対しての偏見というか屈折した見方を持つている。しかもどこかしら雪乃ちゃんに通づるものがあり、なのにあの子とは対照的に対人スキルが身に備わつていないコミュ障というちよつと変わった子。でも雪乃ちゃんにとつては色々と殻を破るきっかけを与えてくる男の子で、ゆくゆくは雪乃ちゃんの婿にでもと私は考えてる。

そんな彼が雪乃ちゃん曰く、言葉通りの女誑しになつてしまつているみたいなのだ。確かに、彼の周りには彼に惹かれてる娘がたくさんいる。雪乃ちゃんを始め、ガハマちゃんに一色ちゃんにめぐりはどうなんだろう……、あと隼人のお友達も一人陥落してたわね。しかも小学生……あがりの中学生か今は……にも手を出しているらしい。あ、それと一番危険なのが妹ちゃんだつたわね。彼の一番身近にいて、みんなが知らない彼のことで知つていて、なおかつ彼はシスコンだからいつ間違いが起きても不思議じゃない。んーまあ、比企谷くんだし大丈夫だとは思うんだけどね。ヘタレだし……。

翌日。

結局、心配なので来てしまいました。

んー、来たはいいけどそもそも私は何が心配なんだろうね。雪乃ちゃんのストーリーカー
癪かなー。それとも比企谷くんが間違いを犯してしまうことかなー。ま、彼に会えばな
んとかなるでしょ。

それから奉仕部の部室へと行き扉を開くとー

………何か見えてはいけないものを見た気がするわ。

一度扉を閉めて、再び開けるとー

ーああ、夢じゃなかったみたいね。

比企谷くんはいた。ちゃんといつものように読書をしている。うん、彼は特に変わっ
てはいない比企谷くんだ。

問題なのは彼の周りにまわりつく三人の女の子。と対極の位置にいる二人の女の
子。二人組の方は言わずもがな、雪乃ちゃんとガハマちゃんである。なんか密着しすぎ

でゆりゆりしく感じるけど、今はそっとしておこう。

それよりもこれはどういうことなのかしら。比企谷くんの右腕に肢体を絡める一色ちゃんに彼の背中に抱きつき首に両腕を絡める妹ちゃん。そして彼の膝の上を陣取り、抱きつくように胸の中に顔を埋（うず）めている……………誰？

それからみんなが私のことに気づくまでに何時間が流れたのか分からなくなる感覚に陥ったけど、実際はほんの数秒だったと思う。

えつと……………、君たち何してるの？

そんな言葉を私は投げかけた。

けど、返ってきた言葉は私の斜め上に行くものだった。

「見ての通り先輩に抱きついてます。ねー、せーんぱい」というのが一色ちゃん。

「あ、陽乃さん。やつはろーです。今、小町は兄の背中を揉んでるんですよー」となんか怪しい言葉を発する妹ちゃん。

「……………八幡の……………汗くさい……………」と顔を隠す女の子。

えつ、ちよ、ほんとこれどういうこと!?

さすがの私でも理解が追いつかないんだけど。

この中で一色ちゃんがまともに見えるのは気のせいかな……………。

妹ちゃん、それ絶対当ててるよね。

いや、それよりも正面から抱きついてる子！　もうヤバいところまできてるよね！

取り敢えず、比企谷くんから一旦離れてもらった。

落ち着け、陽乃。私は雪ノ下家の長女よ。並大抵のことでは動じないんだから、これくらいで動揺を見せてはいけないわ。しっかりするのよ、私。

まずは比企谷くんに説明を求めよう。

この子達じゃ、主観的にしかならないだろうし。

で、返ってきたのは分からないという一言だった。

ただ、一番最初に抱きついてきたのはガハマちゃんなんだとか。そのうち一色ちゃんも抱きついてくるようになり、ゴールデンウィーク明けには留美ちゃん（正面から抱きついていた子で中学生なんだって）までもがこんな状態になっていたという。うん、まあ、いつかはこうなるかもしれないとは思ってたけど、それよりも妹ちゃん。「小町はこれがいとも通り、というかぬるいくらいですよ」ってどういうこと!?　お姉さん、もう頭痛くなってきたんだけど……………。

それから、比企谷くんにどうして嫌がらないのかを聞いたら、

妹ちゃんは「ご飯抜きにすると脅してくる。」

一色ちゃんはなんだ言いくるめられて、既に諦めた。

留美ちゃんは断ると泣きそうになるから断れない。

ガハマちゃんは一度引つ付くと吸盤でも付いているかのように離れない。

なんだって。

雪乃ちゃんの名前がそこに出てこないのは雪乃ちゃんらしいわよね。

これだけみんなが欲望のままにしてるんだから、雪乃ちゃんも正直になればいいの
に。

はあ………心配で来てみたけど、すでに手遅れだったわね………。

これからどうすればいいのかしら。

取り敢えず、今日は帰ろうかしらね………。

「あ、はるさん先輩！　そこ、さつき先輩が紅茶こぼしたところでまだー」
え？

椅子から立ち上がって扉の方へ向かおうと、足を切り返したら、つるんと滑る感触が
あり、地に足がつかない感覚が全身を包んでいく。

あ、やばっ！

倒れながら、今更気付いた。

私、超動揺している。

雪乃ちゃんが比企谷くんに取りられるかもしれないから――

比企谷くんが誰かにとられるかもしれないから――

私の知らないところで私よりもみんな先に進んでいるから――

なんだ最初から何を心配してるのか心は分かってたんじゃん。

ああ、私も雪乃ちゃんのこと言えないわね。

.....。

.....。

痛くない？

衝撃はあつたけど、どこも痛くない。

それよりも何この匂い。

それとあつたかい……………？

私が今の状況を整理していると「大丈夫ですか」と彼の声が耳元から聴こえてくる。

ツツ!?

え？ 何この感覚……………。

ちよ、これはさすがにやばいって!?

なんか急に体が熱くなってくるし、彼の声が鼓膜を震わせてきて、何も考えられなくなってくるし。

しかもこれ、抱きしめられてるんだよね!? 比企谷くんに私抱きしめられてるんだよ

ねっ!?

やばいやばいやばいやばいっ!!

こんな抱きしめられて彼の熱なんか感じちゃったら、いろいろとやばいよ。

それにこの匂い。比企谷くんの匂いだよね。ああ、だめ、脳が、脳に、……………だめえ。

はあ、はあ……………はあ……………こんなのでしたら、そりや、みんな落ちちやう、よね……………。

だって、彼のこのフェロモンの匂いは、私たちには媚薬でしかないんだから………。

千佳のターン

えー、どうも仲町千佳です。

突然ですが、最近の折本かおりは比企谷君に夢中である。しかし、学校が違うためバレンタインイベントを最後に会えていないらしい。かおりは日に日に比企谷成分が減少していつて、今では毎日のように比企谷君と葉山君とデーゴホンゴホン、放課後に遊んだ時のことやクリスマスイベントの話を毎日のようにしてくる。かれこれ半年前くらいは経つてるといふ話を永遠としてくるのだ。正直言つて面倒くさい。何が面倒つて同じ話を二桁………三桁いくかもしれないペースで聞かされているのだ。強制的に。面と向かつて。

私はあれから二人とは会つてないけど、比企谷君についてはかおりから毎日聞かされているため、最初の印象とは大分変わった。あんな暗い人の何がいいのか甚だ疑問ではあつたけど、なぜか葉山君は彼を評価してるみたいだし、かおりはかおりで日に日に「比企谷」という言葉を使う機会が増えた。

そもそも比企谷君って何者なんだろうね。

私が実際に目にした比企谷君は根暗でデーウオツホンゴホン、お出かけのセンスのか

けらも感じられないような総武高校の男子生徒である。それに彼はかおりと同じ中学で一度かおりに告白もしたことがあるんだとか。当時のかおりのことは知らないけど、あんなのに告白されたら、そりや断るよね。

なのに、クリスマスイベントで再会してからはかおりの中での彼の印象は大きく変わったらしい。その前にもあの二人とのお出かけで登場した女の子二人を見て、何かを理解したような感じであつたが、それでもようやく比企谷君という者の理解に至つたらしい。なんでも彼はクリスマスイベントに総武高校の生徒会長から助っ人を頼まれてきたんだって。その時点で生徒会長に頼られるくらい意外とすごい人なのかもつて思つたけど、これはまだ序の口。もつとヤバいのはうちの生徒会長玉繩の轆轤回しについていってたということだ。なんであの生徒会長ないし生徒会メンバーは同じ意味の言葉を並べるんだろうね。聞いてるだけで頭が痛くなつてくる。

で、まあ話を戻すと比企谷君もあつち系の人なのかもという疑問が出てくるわけだ。前にあつた時にはそんな感じを全く匂わせなかつたのに……でもどうやらそれは誤解のようで、比企谷君自身、自分が何言つてるのか分からなかつたんだって。逆に通じた方に驚きだつたんだとか。ヤバくない？ 超ヤバイよね。かおりじゃないけどウケる。

要するに比企谷君はあんな見た目でも優秀であるということだ。そりや、総武高校に

通つてる時点で頭いいのは確かだけど、なんというかああいう感じの人っていわゆる引きこもりとかじゃん？ だから、彼もそうだとばかり思ってたんだよね。そういや前に葉山君が「人を上辺だけで判断しないでくれ」的なことを言ってたな。多分そういうことなんだろうね。私はあの一回しか比企谷君に会ってない。だから彼の人のなりを判断するには早すぎたのだ。それはかおりも同じ。いくら中学が同じだったからって、彼と親しかったわけでもないのに、同級生というだけで分かったようになっていた。だから、葉山君に怒られたんだ。

世の中、葉山君のように完璧な人ばかりではない。比企谷君のように見た目だけで判断してはいけないような人もいるということだ。いや、あの葉山君の印象ですらもこちらの思い込みなのかもしれない。彼の、彼らの何を知ってるのかと言われれば何も知らないと答えるしかないくらい、何も知らない。

葉山君、比企谷君、あの時は本当にごめんなさい。私が、私たちが間違っていました。見た目だけで判断するのはもうやめます。これからはちゃんとその人と接してから判断するようにします。だから、葉山君のこともっと教えてください。

なんて今なら言えるかもしれない。うん、やっぱ無理。恥ずかしすぎる。

なんて考えていた日の放課後。

私とかおりは街をぶらぶらしていた。特に目的があるわけでもなく、かといって早く帰っても………という受験生らしからぬ思いからである。なによ、少しは現実逃避くらいしたつていいじゃない！

まあ、でも今はそんなことがどうでもよくなるようなものを目にしている。あれはなんなんでしょうかね。

私たちの反対側を歩いていく六人の男女。

男一人、女五人。

両手に華どころか、四方を埋め尽くされて歩く目が腐っている総武高校の制服を着た男子生徒。

背中には一人だけ中学の制服をまとった女の子がおぶられて寝ている。

左腕には胸の大きなお団子頭の女の子が抱きつきたそうに体をうずうずさせている。右側には綺麗な黒長髪の女の子が澄ました顔で男子生徒の袖を掴んでいる。

そして前には亜麻色の髪の女の子と肩くらいまでの髪のアホ毛が立った女の子、後ろ向きで歩きながら話しかけている。

………え、つと………。

あれはマジでなんなの？

ハーレムってこの世に存在したの!?

というかあれ比企谷君だよね!?

両側の女の子は見たことあるし。

えっ？ なに、これ。どゆこと!?

そんな思いでかおりの方を見ると、すでにいなかった。

もう一度視線を彼らに戻すとかおりが六人のところに向かって走っていき、比企谷君に抱きついていた。

葉山君、ごめんなさい。人を見かけで判断するなと言われたけど。私もそうしないと誓ったけど。

さすがにこれは無理……………。

比企谷君は……………鬼畜だ。

めぐりのターン

六月のある日、久しぶりにはるさんから電話があつた。最初は大学生になつて二ヶ月経つた気分を聞かれたりしたけど、私はどこまで話したのかまるで覚えてないの。だつて、はるさんが切る前に一言意味ありげなことをつぶやいたんだもん。

『比企谷くんの声つて媚薬だよね』

そうこぼして、すぐに切られた。

一体どういふことなんだろう。

比企谷君の声が媚薬つて意味がわかりませんよ、はるさくん。

それからというものずっとそのことが頭から離れなくなつていた。

講義中もそのことばかりが頭の中を走り回り、ここ一週間の授業の内容が全く思い出せないくらいには重症である。中間テスト終わつててよかつたよ……………。

でもそろそろ気になりすぎて何ににも手がつかない状態なので、母校へと来ちゃいました。

今日は由比ヶ浜さんの誕生日前日でもあるから、別に私が来ても何もおかしくはな

い、よね。

そして今は奉仕部のドアの前で深呼吸中。上を見渡せば白い表札がシールでデコレートされていた。前見た時よりもシールの数が増えているのは気のせいかな……。それと驚きなのはちゃんと奉仕部と書かれていることだ。学年が上がって新入部員でもはいつたのかな。

でもその下に小さく『私たちのご主人様の部屋』って書いてあるのはどういうことなんだろうね。ここって奉仕部だよね……? ……? ……? え? ま、まさか?! そ、そういうことなの?!

だんだん強くなってきたけど、ここまで来たのだから心を固め、震える手で扉を開ける。やだ、私なんでこんなに震えてるの……? ……? ……?

中に入ると想像しないようにしていた光景がそこにはあった。

え? え? ええっ?!

ひ、ひひひひ比企谷君っ?!

こここここれは、どっどっどっどうということなのっ?!

比企谷君の周りには一色さんと他にもう一人女の子が引っ付いていた。

「城廻先輩、お久しぶりです」という彼の声は今も昔も変わってない。昔というほどでもないけど。

いつものように本を読んでいる、というわけではなく、ケーキを食べていた。

あ、そうか。今日は由比ヶ浜さんの誕生会でもしてたのかな。でもそれにしたって、彼の周りはおかしくない？

とりあえず、比企谷君から出されたパイプ椅子に腰を落とす。その間、一色さんともう一人の女の子はじつと彼のことを見ていた。そして彼が椅子に戻ると再び抱きつき始めた。

しばらく日常的なことや私が卒業した後の学校の話を聞かされた。一色さんは引き続き生徒会長を務めているようで比企谷君がよく駆り出されてるんだって。そして新たに比企谷君の妹さんの小町さんが奉仕部に入ったんだとか。そういや前に言ってたもんねー。妹が総武高校に来るって。確定事項みたいに言ってたけど、ちゃんと受かってよかったよ。

それともう一人、明らかに制服の違う女の子がいる。名前は鶴見留美ちゃんというらしい。中学生だけど、ひよんなことから奉仕部に入入りするようになったんだって。よくそんな許可が下りたなーと思っただけど、そういえばここに最高権力をぶら下げた子がいたんだって。私でもそんなことしたことないのに、一色さん権力をフル活用しすぎだ

よー。

私も雪ノ下さんの手作りケーキをいただいて、由比ヶ浜さんにプレゼントを渡した。数が一個少ないように感じるのは気のせい……じゃないよね。

気になって聞いてみたら明日は比企谷君の二人でお出かけなんだって。それが由比ヶ浜さんが比企谷君におねだりしたプレゼントなんだとか。たぶん、「ヒッキーの一日をちようだいっ！」とか言われたんだらうな。あ、やだ、私ったら……少女漫画の読みすぎだよ。

それからみんなと楽しくおしゃべりをしながら、日が暮れるまで過ごした。その間、いろんなことに気がついた。

まず一つ目はここにいる女の子全員が比企谷君が好きみたいである。あの雪ノ下さんまでもがそんな気を俄かに感じさせてくるの。まあ、由比ヶ浜さんは出会った頃からだし、一色さんも留美ちゃんも私が来た時から彼に抱きついてる時点で確定。問題なのは妹の小町さんである。彼女は妹なのである。血の繋がった妹なのである。なのに彼女の比企谷君を見る目が時折妖しいものになっている。ふとした仕草でも彼の欲望を引き出そうとするような、そのなんというか……い、色を帯びているのだ。

それから二つ目。たぶんこっちはもつと危ない。そんな小町さんをよく見てみると……その……あう、恥ずかしいよう……なんでこんなことしてるのー

………えつ、とね、小町さんがパ……下着をつけてないような気がするの。気のせいだったらいいんだけど、スカートから………その、下着らしきものが、見えないの。暗くてよくは見えなかったし一瞬だったからアレだけど………絶対アレ肌の色だよお。

　　というか比企谷君にさりげなく触らせちゃってるし………。ねえ、二人つて兄妹だよねっ!? 血の繋がった兄妹なんだよねっ!?

　　三つ目は三つ目で危ないよお。なんで留美ちゃんは比企谷君の匂いを十分に一回は嗅いでるのっ!? 留美ちゃんそういうのはまだ早いよー。私だつてしたことないんだからー。

　　という彼女たちの危険な行動に私の頭はパンク寸前だった。それになんだかみんなを見てみると体がムズムズしてきちゃった。なんとというか私も男の子に抱きついてみたい………なんて。比企谷君だったらちゃんとして受け止めてくれるかなー。私比企谷君だったら………。つて私今何考えてたのっ!? それはだめだよっ! いろいろとダメなんだからね!

　　そしてそろそろお暇しようと立ち上がった時、事件は起きた。

　　彼女たちに当てられ、ムズムズしていた私の体は立ち上がれるほどの力も無くなって

いたようで、立った瞬間自分の体を支えられなくなってしまった。

ああ、私……………このまま頭ぶつけちゃうんだ。

そう思つて覚悟を決めていたのに、倒れた痛みはあつても頭には一切衝撃が来なかつた。それよりもなんだか甘い匂いがある。それに頭に人の熱を感じる。なんだろう、この匂い。段々私の体を内側まで溶かしていくような、脳をおかしくさせて何も考えられなくなっていくこの甘美な匂いは一体なんなんだろう。あつ、やだ、今なんか背骨に電気がピリつてつ!?

え? なに、これ……………?

痺れるように体が動かなくなつてい……………く……………うツツ!?

や、これつ、きもちいいつ!?! 痺れて、ピリピリして、痛いはずなのに!?!

き、きもちいいいいいいつ!?!

「城廻先輩」

あ、……………えつ? 比企谷君?

だめだよ、今そんな声で私を呼んじやだめだよお。

余計にきもちよくなつちやうからあ。

「怪我はないですか」

耳、耳元でしゃべらないで!?!

くすぐったくて、刺激が強いよお。今こんな刺激受けたら、私……………わたし

……………
「……………いいですよ」

「……………ツツツツ!!」

な、に……………こ、れ……………。

わたし……………こんなの……………初めて……………。

はあ……………はあ……………はあ……………はあ……………。

ひどいよ、比企谷君。最後にあんなに優しく頭を撫でられて強く抱きしめられておまけに耳元で囁かないですよ……………。しかも絶対バレてたよ、あれ。……………恥ずかしい。

でも、うん。なんか分かった気がする。はるさんが言ってた「比企谷君の声は媚薬だよね」っていうのはこういうことだったんですね……………え? あれ? ていうことははるさんも比企谷君に……………?」

ツツツツ!!」

やだ、なんか背筋にゾゾゾってした。寒気? でもないし悪寒でもない。なんというかゾクゾクするというか興奮するというか。って私何言ってるの?!」

これじゃ比企谷君に落とされるのも時間の問題だよ。あんまり会わないほうがいいのかな？ でもそれはちよつと寂しいな……………。

比企谷君に、ご主人様にもつと頭撫でて欲しいな……………。

沙希のターン

三年になってから私は比企谷の隣の席になった。その時にようやく私の名前を間違わなくなった。意外と今まで席が近くなるということすらなかったから、どこか新鮮さも感じられる。これで気分良く新学期を迎えられて受験モードに入ることができる。

最初はそう思っていた。

二ヶ月経った梅雨空の季節。

比企谷との関係はいたって良好だ。

お昼にはおかずの交換をしたり、休みの日にはけーちゃんと三人で遊んだりもしている。ゴールデンウィーク前に一度、公園で比企谷とバツタリ出会い、それからけーちゃん遊び相手になったりしてくれている。何気にあいつは小さい子の面倒見は人一倍良く、けーちゃんは最初っから比企谷に懐いている。そりやもう、こっちが嫉妬する具合には。どちらに対してなのかはわからないけど。

だけど、それはどうやらあたしが特別だからってわけじゃない。あたしの他にもクラス内じゃ由比ヶ浜とかがその例に上がる。学年が上がってからはしよっちゅう抱きつ

いてるし、あたしが横にいても構わずベタバタしている。比企谷も比企谷で彼女の胸にご執着のようで、嫌がるそぶりを見せない。以前だったら嫌がりそうなものにも………。他に近い席のやつで言えばあいつの後ろを陣取る相模。一見何の関わりも持っていないさそうな二人であるが、去年の文化祭後ではかわいそうなお姫様と最低の男として学校中に噂が広がっていた。次第に収束したものの、あたしは今でもそのことを覚えてる。まあ、どうせあいつがまたやらかしたんだろうけど、見ていていい気分じゃなかった。だけど、当の本人は特に気にしてるそぶりを見せないの、あたしはその話には触れないようにしていた。

なのに、学年が上がり席が近くなったことで、相模に変化が起きた。目の前で由比ヶ浜とイチヤイチャしてようが気にしなさそうなあいつが、ある日消しゴムを投げつけてきた。それが二ヶ月くらいは続き、今では比企谷の背中や脇腹に攻撃を仕掛けている。端から見ているとただ気がある男子にちよっかい出してるようにしか見えない。そんな二人というか三人というか、を見ていてなんかモヤつとした蟠り？ みたいなのがちよっくと胸を刺す。別に由比ヶ浜のように抱きつきたいわけでもない。だからと言って相模みたいにならなかつかいを出そうとも思わない。なんというか、そう、やつとできた話し相手が取られた気分………。みたいな？

ああ、話し相手と言ったら、もう一人危険なのがある。

海老名姫菜。

このクラス、果てには学校一のトップカーストに属する赤縁眼鏡女子。ひよんなことからあたしは彼女に気に入られてしまい、たまに話しかけてくる。主に比企谷と葉山のカップリングがいいよねー、とかいうあたしには理解し難い内容だけど。それでもまあ、こんなあたしにも話かけてくるような女子である。

だが、あたしの知らないところで比企谷は彼女までもを落としていた。本当にいつそんなイベントがあったんだろう。

彼女はあたしと交代でお昼に比企谷に会いに行っている。いわゆる密会というやつだ。たぶん、雪ノ下あたりは知ってそうだけど。あれもあれで怖い。朝から比企谷を見張るようにそっと陰に潜んでいるのだ。通報しようか迷ったくらいだ。そんな彼女が知らないわけないよね……………。

で、話を戻すと海老名は比企谷がこよなく愛するベストプレイスと呼んでいる場所に行っているいろいろな話したり触ったりしているらしい。なんでそれを逐一あたしに報告してくるのかは疑問だけど、ちよつとやりすぎじゃないかと思うようなこともやっている。比企谷に抱きついて匂いを嗅いで胸に顔を埋めているんだって。それがまた落ち着くのなのと言っていたが、ある意味由比ヶ浜よりアウトかもしれない。由比ヶ浜は公衆の面前で抱きついているため、なんとか周囲の目によって抑えられているが、海老

名の方は人目のないところで一体どこまでしているのやら……………。あ、べ別に羨ましいとかそういうんじゃないからな。

とにかく！

今の比企谷にはどこかモヤモヤしたものを感ずるのだ。なんか手が触れたりするだけで体が急に暑くなってくるし、おかずの出来栄えを比企谷に褒めてもらえると素直に嬉しい。会話がなくても二人でお昼を食べている時の空気は心地いいのだ。

でもそれがあたしだけじゃないってのはなんか……………こう、ムカつく。比企谷のくせに生意気というか、……………うん、やっぱりムカつく。

そもそもなんで比企谷はあんなに女の子に囲まれるようになったんだろうか。やっぱり文化祭の時みたいになふざけた言動が後々に響いてきているんだろうか……………。あれ？ でもまずそういうのってあいつが誰彼構わず言うことはないはず……………っ!?

え？ なに？ まさか、そういうことじゃないよね？

この目の前の男はハーレムなんてものを築こうとかしてないよね？

あ、でもそれだったら、いろいろと納得はいく……………ね。こいつの妹の小町も最近

では兄を見る目から男を見る目が変わってきているし。あれもよく抱きついてるし、そういうやつだったかクリスマスパーティーで主役をしていた女の子を昇降口で見かけた気がするし。

え？ マジ？

さすがにそれはヤバくない？

あ、でも年下には優しいし………ロリコン？

あの生徒会長にも甘いつて話だし。

え？ じゃあ、けーちゃんもいつか狙われる………というかもう………？

うそ………うそ………妹に？ 取られる？ 妹を？ 取られる？

あああああああああああああああああああああああつ!?

もうわけわかんない!?

とりあえず、何かが取られていくことは分かったから、もうこの話はなしっ！

妹は絶対に渡さないし、比企谷も誰も渡さないんだから！

「おーい、川崎。お前、今ものすごい顔になってんぞ」

ひっ?!

こ、こここのバカッ!?

いいいいいきなり話しかけてこないでよ!

ちよ、なんで頭触って?!

あ、また……………うう……………。

「前にけーちゃんが『さーちゃんはあたまをなでられたことすくないからたまにははーちやんがやってあげてね』って言ってな。そんなお前を見てたら、俺の百八あるお兄ちゃんスキルがオートで発動しただけだ」

なんて顔を赤くしてそっぽを向きながら言ってきた。

なんなのよ、あんた。

その適度に刺激を与えてくる感じ、ほんっとムカつく。

ああ、なんかもうどうでもいいや、思ってしまうあたしにもムカつく。

ずるいんだよ!

このバカ、ボケナス、八幡!

ふふっ。

かおりのターン

ああー、比企谷に会いたい……………。

比企谷に会いたいー……………。比企谷に会いたいよー……………。

最近のあたしは何かがおかしい。まあ、何かとは言ったけど原因はわかっている。

比企谷だ。

あの捻くれ者にバレンタインの時から会えていない。それが今のあたしのウケない状況を作り出している原因である。

最初はほんの偶然による再会から、クリスマスイベントやバレンタイン手作りチョコ教室を経て、比企谷という存在を改めて見返してきた。中学までのつまらない比企谷とはまったく違うなんか新鮮な比企谷になっていた。

うん、まあそれだけだったんだけどなあ……………。

それがここ最近、んー具体的に言うとか春休み前くらいからかなー。なんか無性に比企谷に会いたくなつた。千佳に言ったら遊びにでも誘えばいいじゃんって言われたけど、連絡先とか知らないんだよね……………。聞くタイミングがなかったというか、ここまで頭

を埋め尽くしてしまうような存在になると思ってたからさー。聞きもしなかったんだよねー。あーあ、あの時のあたしってほんとバカだよねー。ちゃんと聞いとくときなさいよ。

で、今に至るんだけどねー。総武高校に乗り込もうかと思ってたけど、というか千佳を巻き込んで校門前まで行ったけど、いざって時に足がすくんじやうっていうね。超ウケる！そのまま梅雨入りまでしちゃったけど、まだ比企谷に会えていないあたしって意外と臆病だったのかね……。いや、でも他の男子にはそんなことないし、逆にあの生徒会長は苦手なままであるからな……。ぶくくくつ!?　なんかこの言い方、比企谷みたいで超ウケる。

そんなことをいろいろと千佳に話した。愚痴も込めて話した。そしたら、千佳が「比企谷くん」って言おうとしたのを「比企谷きん」って風に囁んだ。……。あつははははははっ!?　ヤバイ!　思い出しただけで超ウケるんですけど!　バンバン机を叩いちやうくらいい笑いが止まらない!

……。はあ……。はあ……。とまあ何が言いたいかといえは、中学の時に比企谷菌っていうあだ名があったなー、っていうことだ。で、その比企谷菌ってのが最近妙に引つかかるのだ。なんとというかあたしも感染してるんじゃないだろうかという風に。

寝ても起きても頭の中はいつの間にか比企谷のことでいっぱいになってるし、その周りにいる女の子の姿も見た回数が少ないのに、妙に顔まで思い出せてしまうのだ。しかも比企谷にしばらくというか四ヶ月近くも会えてないからか、比企谷のことを思い出すだけで、胸がきゅうつと締め付けられる感じがする。体は熱くなってくるし、呼吸も荒くなってくる。しまいには触りたくなくなる始末。これは比企谷菌に感染しているとみてもなんらおかしくはないよね。

さて、どうしたものかね。あたしがこんなことになるなんて、しかも比企谷に対してだなんて夢にも思ってたからなー。それに比企谷のことは一度告白されてふってるんだよね……。まあ、でもあの時の比企谷じゃこんな気持ちにもならなかっただろうけど。だから、惜しいことをしたとは思わないし、あいつもそんなこと思ってもないよね。前にそのことをさりげなく話したら、今はそんな気はないって言ってたし。あたしもその時はなんとも思わなかったはずんだけど、その言葉を今思い出すと胸が苦しくなるのはなんでもなのかなー。

それから六月の中頃、あたしと千佳は街へと繰り出してきていた。受験生だけど、たまには息抜きも必要じゃん。しかも最近じゃ比企谷のことで頭がいっぱいで、勉強にも集中できない。元々勉強にさほど興味があるわけでもないけど、周りの空気に流されて

ぼちぼちとやっている。といつても千佳とやってるから全く進まない。なんて考えながら隣を歩く千佳を見ると足を止めてどこかを眺めていた。不思議に思ったあたしも彼女の視線をたどる。

ツツツ!?

ヤバい!!

え? なにこの感じ?

ヤバいヤバいヤバい、なんかよくわかんないけど超ヤバい!

と思つたら体は正直なように勝手に視線の先にいた目の腐った総武高校の制服を着た男子生徒に抱きついてた。

ああ、そうそうこの感じ。この匂い。落ち着くわ。

すりすりと男子生徒の胸に顔を擦りつける。次第にぐりぐりと力強くなってるのは気のせいだよな。

「え? ちよ、なに? これ、どゆこと!?!」って低い声が頭の上から聴こえてくる。おお、おお、今日も通常運転でキョドってるねー。ヤバい、なんか無性に嬉しくなってきたん

ですけど！

「ちよ、その人！ 先輩に何してんですか!? そこは私の場所です!」という声や「ちよつとあなた。いきなり抱きつくなんて不躰けにも程があるわ。離れなさい!」という冷たい声や、「ふおおおおおおおおお!」また、新たなお義姉ちゃん候補が!?: ……つて、かおりさんか」という聞いたことのある声が聞こえてくる。だけど、今はそんなことはどうだっていい。あたしはあたしの欲望に従うのみ! うへへへへつ、
・比企谷く、会いたかったよー。

この後、みんなに（もちろん千佳にも）怒られました。まあ、怒ってるのを聞いてたら、比企谷の周りにいた女の子は全員比企谷菌に感染してるっぽかったけど。あの比企谷の妹まで女の子でしたよ! どうしよう、超ウケる展開なのに全くウケない……。

それによく考えてみると、今の比企谷つて女の子五人に囲まれて歩いてたつてことですよ。しかも一人は中学生つてどういうこと!?! 全員顔は覚えてるけどさー、なーんかこう胸のモヤモヤが広がってるんだよねー。

で、今はなぜかみんなでサイズにきている。比企谷の尋問を行うとかいう理由で、あたしたちも連行されてきた（千佳はただの被害者だけだね）。比企谷兄妹はついでに晩

御飯も済ませてしまおうってことになったようで、がつつり頼みでした。といってもミラドリとマルゲリータを比企谷が頼んで、妹の小町ちゃんの方がサラダとスパゲッティを頼んだだけだけど。後はデザートとかを適当に頼み、全員が長話になることを見越してドリンクバーをつけた。中学生の留美ちゃんだっけ？ は比企谷がお代を持つらしい。さすがに中学生を付き合わせるんだからそれくらいはな、って言ってた。変なところで律儀って言うか面倒見がいいっていうか。

それから比企谷が一人、ドリンクバーを取りに立ったので、女の子だけの時間になった。そこであたしは疑問に思っていた比企谷菌感染の有無について聞いてみた。まあ、まずは比企谷菌についての説明からだったんだけど、説明したらどうやら全員心当たりがあるようだ。あたしの症状に似ているのが、生徒会長の一色ちゃんと雪ノ下さんで、留美ちゃんと由比ヶ浜さんはあたしたちの症状をより悪化させたものだった。小町ちゃんは、その………なんというか全員がぶっ飛ぶようなことを平然と口にしてたってことだけは言っておくよ。あたしの口からとてもじゃないけど言えない。超はずい。

それから食事をすませ、再び比企谷が席を立ったので、話がまた戻った。で、なんと雪ノ下さんのお姉さんが比企谷の声やフェロモンは媚薬だと言ってたらしい。というかお姉さんまで落ちてるよね。なにそれ、超ウケるんだけど。

そして、みんな一斉に気がついた。それは比企谷菌というフェロモンが媚薬効果を

持っているという事実には。しかもそれはあたしたちにしか効かないんだとか。理由は比企谷のことが好きだから、だって……………。

え？

ん？

あれ？

ということはあたしって比企谷のこと好きなの？

つい思ったことを口に出したら、今更!? って驚かれた。みんなでハモるとか超ウケるんだけど。

でも、そっか。

あたしは比企谷のことが好きなのか。

うん、まあ、それなら納得……………かな。

でも、あたしがねー、比企谷をねー。

なにがきつかけなんだろうね。

意外と超どうでもいいことだったりして……………。

うわっ、超ウケるんですけど！

姫菜のターン

はろはろー。

サキサキのいう赤縁眼鏡の・姫菜さんだよー。

取り敢えず、これ聴いてねー。

『……………ちよ、あの、海老名さん？』

『なにかな、ヒキタ二君』

『あつ……………その、えと……………』

『んー？』

『俺の太ももを撫で回すのはやめてもらえませんかね、ちよ、マジで！』

『いやです、とエビナはあなたの太ももを撫でる力を強めながら拒否します』

『ちよ、おまつ!? そこは?! つか、なんでどこぞのクローン体みたいなの口調になつてんだよ』

『ええー、いいんじゃないん。減るもんじゃないんだし』

『減るからっ!? 思いつきり俺の精神がすり減ってるからっ!?』

『またまたー。ヒキタニ君もこういうの好きでしょ?』

『だ、だから、その手を離あああああああつ!? な、なにしゃがる!? さすがにそれは洒落になんねーつて!』

『だめだよー、そんな大声出しちゃ。誰かに聞かれないんだつたら、話は別だけど』
『うっ、……:……ならその手をどうかしてくださいお願いします』

『おおー、意外と威勢がいいね』

『潔い間違いでしょ』

『ん?』

『ん?』

『あ、そうだったね、こっちも見せないとだめだよ。もう、ヒキタニ君はマニアックな
んだからー』

『はっ? つて、ちよつと待て!? なんでそこでスカートをめくる!』

『え? だつてヒキタニ君はこういうのが好きでしょ?』

『さつきと同じニュアンスで言ってきてるけど、それ絶対意味合い違うだろ』

『ほれほれー。なんなら触ってみそ』

『からかうのはやめてくださいお願いします何でもしますから許してください!』

と、ここまでだね。

ねえ、このヒキタ二君かわいくない？ かわいいよね!?

普段、女の子に囲まれてるヒキタ二君がこないたらずらで顔を真っ赤にして焦った声を出すなんてかわいいよね。あーもー、最近のヒキタ二君は単体だけでもいいわ。

これもアレだね。結衣たちがヒキタ二君に抱きつくようになってくれたおかげだね。

事の初めは春休みに入る前の三月の中頃。

その日、結衣の我慢がとうとう解かれた。

休み時間になるとヒキタ二君に抱きついて、彼の腕を豊満な胸に挟み、顔を腕にすりすりと擦り付け始めた。いきなりの事でみんな何事かと思ったよ。もちろんヒキタ二君もね。けど、それは毎日のように続き、今ではクラスの風景の一部となっている。

でまあ、それがきっかけとなってヒキタ二君はいろんな女の子から抱きつかれるようになったんだよねー。私知ってるだけでもいろはちゃんとヒキタ二君の妹ちゃんがよく抱きついてる。いろはちゃんは言葉巧みに否定してるけど、みんなのヒキタ二君への好き好きオーラが増していつている。

だからまあ、いいかなって。

私もこれに乗じて参加しようかなって。

彼は私に一度、嘘だけど告白してきている。戸部っちの告白を躲すための手段だったのは分かっている。それも私がお願いしたから。こんな手段で来るとは思わなかったけど、戸部っちの告白だけは避けたかったから。告白されたら私は彼を振るしか選択はない。それでは今の居場所は壊れてしまう。そう思ったから、なんでも分かっちゃやう彼にお願いした。あんなの、誰にも理解できないはずなのに。彼は理解していた。

ああー、今でもあの告白が頭から離れないってのはちよつとヤバイよねー。それと駅で話した時の事も鮮明に覚えている。いやー、私としたことがやつちやつたかなー。高校生のうちには恋をしないようにしてたのになー。

それがあんな嘘の告白で心が動いちやう私ってどうなんだろう。アニメや漫画じゃよくある展開だけど、それを私が実行する事になろうとは……………。

それも全部ヒキタニ君が悪いんだよねー。誰も理解してくれなかった事を理解していたり、少ない言葉で私のピンチを察して助けてくれたり。方法はまあ結衣たちからしたら申し訳ないものだったけど、それでも嬉しいと感じてる私がいるんだから、私も酷い人間だよ。

だからさー、この感情は後の一年半は隠し通そうと思つてたのに、まさかあんなのを目の前で見せつけられたらねー。しかもヒキタ二君もヒキタ二君で全く嫌がらないし。いや、最初は嫌がつてたけどさー。毎日続くと彼の悪い癖が出てきて、すぐに諦めモードになつちやつたからね。うん、もうこれはヒキタ二君が悪いつて事でいいよね。

なので、私はついに三年になつたばかりの四月のある日の昼休みに動いたわけですよ。基本一人でお昼を取るヒキタ二君を追つて奇襲をかけた。まずは適当な会話から始めたけど、思いの外話が弾んじやつた。だから、毎日でも一緒にいたいと思つちやつたんだけど、現実はそうもいかないんだよね。三年になつてからのヒキタ二君の席の隣にはサキサキがいる。そうサキサキが！

あの子もなんやかんやでヒキタ二君のこと好きだから、これを機におかずの交換とかをやつてヒキタ二君の胃袋を掴みにかかつてるわけですよ。なんかヒキタ二君の方も三年になつてから妹ちゃんがついでにお弁当を作つてくれるようになり、家庭の味比べに和んじやつてる始末。だから、私はサキサキと交渉しました。一日交代でヒキタ二君と過ごしましょう、と。まあ、サキサキはあれで押しに弱いからね。赤くなるサキサキもかわいいからちよつと意地悪したくなつちやうのは仕方ないよね。

で、その密会とも言えるお昼の時間の一部始終が最初に聞いてもらったやつつてわ

け。

実はあれには続きがあるんだよー。

聴く？ 聴きたいよね？

『へー、何でもしてくれるんだ』

『え？ あ、その、俺に出来る範囲ではの話ですけど』

『何でも、してくれるんだよね？』

『あ、ちよ、その、近すぎやしませんかね、海老名さん』

『してくれるんだよね？』

『あ、はい……………ヨロコンデサセテイタダキマス』

『じゃあ、そのまま動かないでね』

『え？ あの、海老名さん？ つて、ちよ、なんで正面から抱きついてきてるんですか!?!』

『ああー、これかー。……………すうー……………はあー……………あああツツ!?! や、これ、結

構くるかも……………あつ、……………すご、い……………』

『由比ヶ浜じゃあるまいし、そんなに匂い嗅ぐなよ。それと変な声を出すのもやめてく

れ』

『ねえ、ヒキタ二君。……………抱きしめて』

小町のターン

うちの兄はなんだか言って、根は優しい。

意地を張ったり、苦しい言い訳をしたり、自論の世界の言葉をこれでもかというくらいにこねくり回すけど。それでも兄はいつだって優しい。

そんな優しさに惹かれた女の人がここ最近急増化してきている。きっかけは去年、兄が平塚先生に連行されて強制入部させられた奉仕部。そこで雪乃さんと結衣さんに出会ったことが、大きな要因だと思う。中学までの兄は変な噂ばかりが立てられているような存在だった。いじめこそない、というかちゃんと認識すらもされていなかったがために出た噂がほとんどだった。

そんな兄も高校生になったんだと思ったら、初日から車にひかれるなんて思わなかったけどね。あのごみいちゃんは何でそういうときに限ってやらかすのかな……………。妹として情けないよ……………。

でも、そうなのです。小町は妹なのです。千葉に住む血の繋がった兄妹なのです。だからあんなお兄ちゃんのことを愛おしく思っちゃったりするのは、ただの家族愛なのです。

つてなればよかつたんだろうな。

あれは小学生のとき。

親は共働きでしかもそのころには社畜人生まっしぐらだったので、小町が家に帰ると誰もいませんでした。最初は仕方がないと割り切っていたはずなんだけど、そこはやっぱり幼かったというか、日に日に寂しさを募らせていきました。ある日、我慢が出来なくなり家を飛び出してしまいました。日が沈み出し、影が濃くなっていくのを眺めながら、今頃お兄ちゃんは心配しているのかなーとかぼんやりと浮かべながら、だけどその影が自分を飲み込むように見えて怖くなり、公園の遊具の中でうずくまって泣いていました。帰りたいけど今更帰れない。兄に会いたいけど会いたくない。そんな葛藤が頭の中でせめぎ合い押しつぶされそうになっていたときに、お兄ちゃんは小町を見つけてくれました。それはちょうど逢う魔が時。その言葉を知ったのはずっと後のことだけだ（お兄ちゃんが病気にかかってた時に言った）、大体そんな時間だったと思う。

その翌日からはお兄ちゃんは小町よりも先に帰宅するようになり、寂しさは無くなりました。代わりに変な気持ちが始まり、なぜか兄を愛に意識してしまうようになってしまいました………こればかりは小町の一生の不覚であります。

さすがに兄妹でそんな感情を抱いてしまうのは気の迷いであり、弱い心を覗かれてなお優しくされたのが原因で心のよりどころにしまったただの勘違いだと、自分に言い聞かせました。

それから五、六年経った高校受験も終わり春休みを目前に控えたある日。

兄の様子がちよつと変わりました。

なんというか小町を意識してしまっているのか、時折顔を赤く染め上げるのです。

学校で何かあったのだろうかと思う、詰め寄ったところ案の定結衣さんが原因でした。いきなり抱きついてきたかと思うと、休み時間になる度にひつついてきて離れてくれな。しかもあの豊満な胸の中に腕を絡めてしまうから、おかげで変に意識してしまっている。と。それだけならまあいつものことかな、と流せたのに、この後に発せられたお兄ちゃんの言葉がそれを許しませんでした。

「小町のことまで変に意識してしまって申し訳ない」

普通の謝罪であるはずなのに、その言葉は小町のこと”女の子”として見ているという風にも聞き取れてしまったのです。

押し殺してきた感情は再び表へと引つ張り出されてしまいました。

抱いてはいけない感情に小町はもうあらがう術を失ってしまい、決壊しました。

いやもう、ほんと。

こんなシリアスな空気なのにここからの小町はどうかしている。

次の日から小町は段々と部屋着の露出が多くなっていききました。

兄のおさがりのぶかぶかのTシャツを着て、何も無い肩を見せたり。

超短いホットパンツを履いて、その白地の布を見せたり。

はたまた、兄のぶかぶかTシャツ”だけ”をまとい、膝の上に座ったり。

兄の欲望を煽るような行為は日に日にエスカレートしていき、ついにはお風呂上がり
にタオルだけ巻いて抱きついたりもした。お兄ちゃんは戸惑いはしても嫌がるそぶり
は一切見せず、ただただ小町の為すがままだった。

いや、この時のお兄ちゃんは顔が真っ赤でめちやくちやかわいかったんですよ。あ
れは写真に残しておけばよかったなーと今でも後悔してるくらいですよ。

で、まあそこから小町のスイッチも入ったといえますか、お気付きの人もいる通りの露
出癖ができたと言いますか。あ、別にどこでもやってるわけではないですよ。そう、
ちゃんとお兄ちゃんの前”だけ”という縛りはあるのです。

こうなったのもお兄ちゃんの小町を見る目が日に日に怪しいものになってきて、お兄ちゃんの方からもボディタッチをしてくるまでになって、そこに不覚ながら快感を覚えてしまったのが原因なのです。だから小町が悪いわけじゃない。お兄ちゃんが悪い。

具体的には学校じゃ奉仕部にいる時だけだし、家にいる時も下着以外はちゃんと着ています。だから大丈夫です。

まあでも、そろそろお兄ちゃんが欲望に耐えられなくなつて小町を襲つちやうかもです。その時はその時です。受け入れるまでですよ。今でもお尻とか家の中じゃ普通に触ってくるし、そんな日も近いかもしれないな。

お兄ちゃんたちが三年になつてからはみなさんやる気なようで自分の欲望に割と忠実に行動していて、誰かそのうちやらかしそうだけど。夏休みに入ればお兄ちゃんの誕生日もあるし、いっそそこでみんなをモノにしてもらうというのも一つの手かも………。参加者はえつと……。雪乃さんに結衣さんにいろはさんに、あとは陽乃さんとめぐりさんもですね。それに留美ちゃんと……。沙希さんも呼ばないと泣いちやうだろうな。見たことないけど相模先輩や海老名先輩という人らも呼ばないと後が怖いし、あまり呼びたくはないけどかおりさんも知らないところから聞きつけてきそうだから最初から誘っておかないと……。

うわー、こうして名前を並べてみるとやばいね、お兄ちゃん。十人も知らずに落とし

てるとか鬼畜としか言えないよ。しかも肩書きがまたやばい人たちだし。校内一の秀才にトップカーストに君臨する人に生徒会長に魔王に前生徒会長に中学生にシスコンにツンデレに戸部先輩の好きな人に中学の同級生、あと実の妹。もうお兄ちゃんこんだけいるんだから、一人とは言わず全員貫っちゃいなよ。そうすれば毎日乱れた生活にどっぷり浸かることが………ああ、想像しただけでゾクゾクしてきちゃった。足に冷たい雫がつつつつと垂れていく感触が伝わってくる。ああ、ちよつと興奮してきたかも。そういうのもアリだよ、お兄ちゃん！ それにこんだけいればいろんなプレイを楽しめるんじゃない？ お兄ちゃん、結構マニアックなものいけるはずだし。

そうと決まれば早速ハーレム計画に取りかかりますか。

決行はお兄ちゃんの誕生日。

それまでにみんな行けるとこまで行けるように煽らなくちゃ。

もつと際どい露出にすればお兄ちゃんも周りのみんなも理性が飛ぶのかなー。

明日試してみよう。